

平成 27 年度 入学試験問題

国 語

(帰国生入試)

[注意]

1. 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
2. 解答用紙は、問題冊子の中にはさんであります。試験開始の合図があったら、解答用紙を取り出して受験番号と氏名を記入しなさい。
3. 解答はすべて解答用紙に記入しなさい。
4. 問題冊子の余白等は自由に使って構いません。
5. 試験終了後、解答用紙のみ提出し、問題冊子は持ち帰りなさい。

東京都市大学附属中学校

1 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。なお、本文には省略した部分があります。

絵画の歴史は「暗さ」を勉強するのに役に立つ。それはイメージが偏在へんざいしていた時代に、絵画がどのような光のなかで描かれ、どのような光のもとで見られていたかを想い出させてくれるからである。小さな寺院の内部に掛けられていた※アイコンを見るのと、それを現代美術館の行き届いた照明のもとで見るとでは、たとえ画像として同じでも異なる経験だ。

ひとつの作品でも照明を少し変えるだけで、まったく違う見え方になる。自然光、白熱灯、※ハロゲンランプ、蛍光灯、※ア LEDと色温度が異なれば、当然違う色になるからである。時代と場所によって、※ゴッホの「ひまわり」の黄色が、同じ黄色として知覚されているかどうかは、誰にもわからない。美術品がこれほど、①種々様々な光のもとで眺められる時代は、これまでなかったと言っている。

今日はこれにコンピュータをはじめとした、さまざまな「画面」が新たに加わる。この画面に合った新しい照明環境を考えることは、画面の周囲の暗さを評価することが基本になる。それは中世の寺院や町並みが残っていた「暗さの価値」を再評価することと無関係ではないだろう。

たとえ節電の努力が忘れられてしまっても、わたしたちは「明るいことはよいことか」という疑問は忘れてはいけないのである。闇には闇の価値が、夜には夜の価値がある。人にものを考えさせるのは、明るさなのか暗さなのかを問うべきときが来ている。

彼はネズミ色の服を着ていた。

こう書くと、誰もが同じような色を想像する。実際には白いネズミや黒いネズミもいるのだが、色としてはグレーを考えるのがふつうだ。ネコ色という言葉がもしあったとしても、ひとつの色がみんなの頭に浮かぶとは思えない。明るい色、暗い色、いろいろな茶色も含まれるだろう。ネズミ色のほうは、ほとんど無彩色である。明度の違いだけで彩りのない色、灰色の世界である。

色の好みは人それぞれだが、色の感じ方には共通するものがある。暖色や寒色という言葉があるように、色に温度を結びつけたり、ある感情を与える作用を認めたりする。どの文化でもたいがい赤は注意や警戒感を与えるし、青はその反対に沈静ちんせいをもたらす。ふたつの色を混合して得られる紫むらさきは、日本でもヨーロッパでも昔は高貴な色として、特別な階級の人々の服装に使われた。※『源氏物語』が別名「紫の物語」と呼ばれたように、色が物語を象徴することさえある。

その点、②ネズミ色はあまりいい意味をもたされていない。なにしろ世界中どこでも害獣と見なされているネズミの色なのだし、これを灰色と言い換えても、否定的な意味に結びつく。ネズミ色の服を着た人が、煤けたような壁にaカコマレテ、灰色の茶碗ちやわんを手にしているとしたら、ずいぶん地味で面白くない世界を想像するのがふつうだろう。「灰色の世界」と聞けば、明るく楽しい世界の反対がイメージされるし、「グレーゾーン」と言えば、曖昧でどっちつかずと怪しまれる。

イ 身のまわりに目を向けると、わたしたちが生きている世界には意外に灰色が多い。舗装された道路、コンクリートの建物、さまざまな配管、電柱に電線……都市生活をとりまく環境の大部分

はこの色で占められている。公共空間だけでなく、オフィスや自宅でも多くの「セイヒン」にグレーが使われる。特別な意味をもたず、特別な感情にも結びつく必要がない場所では、グレーのほうがいい。

もし都市環境のあらゆる場所に鮮やかな色がつけられていたら、わたしたちの感覚はマヒしてしまっただろう。また室内の灰色の部分を、すべて違う色に塗り替えたら、混乱と疲労で仕事も勉強も手がつかなくなってしまうのではないだろうか。感覚と感情の安定を支えているのは、実は目立たない灰色のほうなのだ。

ウ 灰色は、ショウキョク的だから、役立っているわけだが、人間は灰色をさらに評価することもできる。そのひとつが白黒写真である。白黒写真は言うまでもなく、世界から彩度を差し引いて、明度だけで表現する。さまざまなグレーの段階だけで表現するのだから、正確に言えば、白黒ではなく、灰色写真である。エ モノクロームつまり「単色写真」とも呼ばれる。面白いことに人間は、彩りのないさまざまな明るさの灰色だけで表現された風景を見て、それを美しいと感じることができる。それにはいろいろな理由が考えられる。

そのひとつは色を差し引くせいで、わたしたちが光と影に敏感になることだろう。たとえば新緑の木々から色を差し引いたとたんに、木の葉の重なるの微妙な影に気がつく。初夏の海をモノクロームにすると、砂と波が、オリなすパターンが見えてくる。

人間の顔もそうである。モノクロームで表現された人間の顔には、肌色とはまた違った趣がある。引き締まった画面の陰影が、人柄の深さを表すこともあるし、人生の時間を感じさせることもある。このように、わたしたちは灰色の無限の段階のなかに、光と影の戯れを見て楽しむことができる。

④ こうした感覚は実は昔から存在していたものだろう。都市のなかでいえば、日本や韓国の屋根瓦がそうだ。グレー一色の世界に見えるが、実はそうではない。同じグレーでも濃淡があるし、また天気によっても色が違って見える。山村の瓦と、漁村の瓦が違って見えるのは、環境だけでなく生活のせいもあるだろう。雲の色を、ハンエイして、夏の盛りには強く照り、雨が降ればしつとりと落ち着く。世界の建築のなかでも、これほど豊かな灰色をもった屋根はあまり見当たらない。

おそらく日本は灰色の美しさに目覚め、それを大切に育ててきた文化をもっている。伝統色と呼ばれる色名の体系を調べてみると、近代以前の日本には、特に灰色系に驚くほど多くの色名があったことがわかる。灰色も灰だけではないのだ。煤にも種類があるし、墨にもいろんな墨がある。派手な色彩を控え、微妙な明暗の変化を愛でる。そのもつとも洗練された芸術のひとつが、茶の湯にちがいない。

わたしが好きな色のひとつに、その名が残されている。それは茶の芸術が完成された時代の名残りとも、また灰色の美学を表していると思える。利休鼠というネズミ色である。千利休の名と鼠の組み合わせがいい。ネズミ色の服を着た人が、竹煤色の小さな部屋で、灰色の茶碗を見つめている。日本の文化はそんな世界に、どんなカラフルな色にもまさる、最高の美を認めることでも

きるのである。

だが、デジタルイメージが生活のなかに溢れるようになって、こうした感覚は大きく変わりつつある。たとえば映画の特殊撮影やゲームソフトといったフィクションのなかで使われてきたようなファンタジックな色、あるいは広告写真で使われているような、唇や肌の色を際立たせたり、反対にソフトにしたりする色彩効果は、コンパクトカメラにさえ装備されている。その特殊効果を、もはや誰も特殊とは思わないだろう。

ある意味で、こうした人工物の世界の色は、もともと人間が作ってきたモノの属性としての色だから、どんな色が何に使われようとも、本質的な変化はないとも言える。デジタルイメージによって引き起こされている色彩の変化は、むしろ「自然の色」の世界において顕著なのだ。

たとえば電子顕微鏡によるバクテリアや細胞の写真。あるいは人工衛星による地表の写真。これらの写真で使われている色は、自然の色だろうか。そうではないだろう。大腸菌やエイズウイルスが紫やオレンジで表示されていたり、熱帯雨林の破壊を示す衛星写真では、残された森が赤に、そのなかを通る道が緑になっている。

これらの「写真」はいずれも情報処理を経たイメージであり、その過程でグラフィック表示上の都合によって、ある特定の色彩を与えられている。わたしたちが慣れ親しんでいるカラー写真の「自然の色」とは、意味合いがまったく違う。地図に使われる色と似たような意味で、それらは便宜的な色であり、そのことが了解されているからこそ、ウイルスが紫で、密林が赤であっても、誰も文句は言わないわけだ。

したがって、科学における「自然の色」とは複雑な問題である。グラフィックの対象となる「自然」は、固有の色をもたないとも言えるからである。たとえば地球の気候のシミュレーションや大陸プレート[※]の動きのグラフィックでは、固有の色の再現や表示が、そのイメージが伝えようとする現象にとつて、本質的だとは見なされていない場合が多い。自然における色彩の変化とは、この点で、自然科学の方法論から必然的に生まれてきたものであるとも言える。

(港千尋『芸術回帰論』より)

※アイコン……キリスト教会史上の重要な出来事を描いた画像。

※ハロゲンランプ……電球の一種で、白熱電球よりも明るい。

※LED……発光ダイオード(LED)を使用した電球。消費電力が少なく、寿命が長い。

※ゴッホの「ひまわり」……オランダ生まれ、フランスで活躍した画家「ゴッホ」の代表作。

※無彩色……彩度は色の鮮やかさの度合いを示し、明度は明るさの度合いを示す。無彩色とは色みがなく明度のみもつ色で、白・灰・黒色のことである。

※『源氏物語』……平安時代に紫式部が書いた長編物語。

※害獣……人間や家畜に危害を加えたり、農作物を荒らしたりするもの。

※千利休……安土桃山時代の茶人で、茶の作法を完成させた人物。

※デジタルイメージ……パソコンやデジタルカメラで写された画像。

※フィクション……想像によってつくり上げられた事から。

※グラフィック……写真や図版を主体にした印刷物。

※シミュレーション……実際に行うことが困難な実験の代わりに行われる仮想の実験。

※大陸プレート……地球の表面をおおう岩ばんのうち、上部が大陸をなしているもの。

問1 ——線 a k e のカタカナを漢字に直しなさい。ただし送り仮名が必要な場合にはあわせて答えなさい。

問2 空らん に入ることばの組み合わせとして最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- | | | | | |
|---|--------|--------|--------|--------|
| 1 | ア だから | イ つまり | ウ そして | エ だが |
| 2 | ア つまり | イ だから | ウ だが | エ そして |
| 3 | ア だが | イ そして | ウ だから | エ つまり |
| 4 | ア そして | イ だが | ウ つまり | エ だから |

問3 ——線①「種様」の□には同じ漢字が入り、四字熟語となります。□に入る漢字を答えなさい。

問4 ——線②「ネズミ色はあまりいい意味をもたされていない」とありますが、文中でネズミ色はどのような否定的なイメージと結び付けられていると述べられていますか。「イメージ」につながるように文中から十字以内でぬき出しなさい。

問5 ——線③「役立っている」とありますが、「灰色」のどのような働きが「役立って」いますか。「人間の」という書き出しに続けて、文中の言葉を使って、二十字以内で答えなさい。

問6 ——線④「こうした感覚」とはどのような感覚ですか。「……がないからこそ、……できる感覚。」という形の一文で、これらの文字をふくめて四十字以内で答えなさい。

問7 ———線⑤「科学における『自然の色』とは複雑な問題である」と筆者が述べているのはどう

してですか。その理由として最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 科学の分野では、情報処理の過程で、色彩効果を最大限に上げるため、「自然の色」に極力近い色で表示することで、事物の固有のイメージを築くから。
- 2 科学の分野では、情報処理の過程で、人が慣れ親しんでいるカラー写真の「自然の色」との取り合わせが一番美しい色を選んで、事物を表示するから。
- 3 科学の分野では、情報処理の過程で、ある事物を人が慣れ親しんでいる「自然の色」とは意味合いがまったく違う色で表示することになる場合があるから。
- 4 科学の分野では、情報処理の過程で、ある事物について地図で表示される色と同じ色を使うことになっていて、「自然の色」とはまったく違う色で表すから。

2 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

「私」が小学四年生のときのこと、頑固で言葉遣いが男っぽいがみんなから慕われていた、清孝の祖母の見舞いに、清孝や仲間たちと出かけた場面である。

天井の電灯を消してカーテンを引き、さらにカーテンの上に私たち全員分の上着を吊すと、病室は真つ暗になった。

「なあキヨ……お前たち」

「いいから」

まるで不安な子供をさどす大人のように清孝は言い、※ キュウリー夫人の襦袢の肩にそつと触れた。

クリスマスのその日、私たちは二学期の終業式を終えると、それぞれ家で昼食を食べてからバス停に集合し、キュウリー夫人の病院へとやってきた。病室は相部屋だが、昨日まで隣のベッドを使っていたという老人がちょうど退院したところで、そこにいるのは夫人一人だった。

私たちがそつと病室に入ったとき、キュウリー夫人はベッドの上で半身を起こして窓の外を見ていた。襦袢の肩口や、すじばつた首のあたりに、ずつと同じ姿勢で動かずにいた人特有の、ひっそりとした線が浮き出していた。ノックを忘れてしまったことに、こちらが気づくと同時に、夫人は振り向いた。途惑い顔の夫人に、私たちはばらばらのタイミングで挨拶をすると、勝手に準備に取りかかった。何も説明せずにやったほうがいいと、事前に相談をまとめてあったのだ。

「姉ちゃん」

慎司の合図で、悦子がショルダーバッグからジャムのビンを取り出した。ベッドの脇からは、布団の上に小さな白いテーブルが迫り出していて、彼女はそこにビンを置いた。暗くて中身は見えないが、水とホタルの幼虫たちと、万一幼虫たちが飢え死にしたらまずいので、※ カワニナが一匹入れてあった。

宏樹がズボンの前ポケットと尻ポケットを探り、四つの携帯用カイロを取り出した。一つをビンの下に置き、残りの三つで周囲を囲むと、それを悦子が、手首に留めていた黒いゴムでビンにくくりつける。

「もうすぐだから」

清孝はキュウリー夫人の肩口で、彼女と視線の高さを合わせるように腰を落とした。不審げな夫人の顔と、少し照れた清孝の顔が並び、二人の目はじつとテーブルの上のビンを見つめていた。そして。

「……光った!」

悦子が声を上げ、手早くゴムとカイロを取り去った。その瞬間、緑色の光がビンの中から一気に放たれて、病室の壁や天井や、窓にかかった私たちの上着や、私たち自身の頬や額や、驚き

広げられたキュウリー夫人の両目を一斉に照らした。そんなふうに見えた。もちろん実際にはありえないのだが、本当にそう見えた。

ビンの中にはたくさんのホタルが飛んでいた。緑色の光たちが、互いにゆらゆらと近づいたり離れたり、ときにサツと横切ったりしながら、美しく輝いているのだった。

慎司がズボンの尻ポケットからカンペンを抜き出して、ビンの後ろに置いた。カンペンの表面にプリントされた絵が、ホタルたちのほのかな光で「ア」浮かび上がった。慎司が厭がっていた、あの漫画的な木々は、私たちの願いと興奮の中で、いまは完全に山の木々となり、ホタルたちを堂々と見守っていた。

「これ、※あの川のホタルなんだ」

キュウリー夫人の耳に口を寄せて清孝が囁く。

「まだ幼虫だけど、みんなが捕まえてきてくれた」

目の前で輝く緑色の光を見つめたまま、キュウリー夫人は黙っていた。きつと、言葉が出てこなかったわけでも、言うべき言葉を探していたわけでもないのだろう。両目に途惑いが浮かんでいるあいだはそのどちらかだったのかもしれないが、途惑いが消えてからは、きつと違った。彼女は自分の胸の中で、誰にもなく言葉を囁いていたのだ。私たちにはそれがわかった。その囁きを、夫人はしばらくしてから声にした。

③「もう……見られないと思ってたよ」

夢見るような声だった。それから夫人は、唇をゆるくむすび、ホタルに目を向けたまま、ときおり瞼を細めたり、そうかと思えば驚いたようにひらいたりしながら、長いこと黙っていた。黒目の表面が濡れて、ほんの少しの身じろぎでも、イ光った。

④「ほんと、花火も見せたかったです」

悦子が申し訳なさそうに言う。

そう、花火についての相談も、私たちはしていたのだ。しかしこちらは、どうしても方法が見つからなかった。ホタルについて上手いやりかたを思いついたせいで。かえって私たちの中で花火に關しての悔しさが高まっていたのは皮肉なことだった。

「お店で売ってる打ち上げ花火を買ってきて、病室から見えるところで上げたらどうかとか、いろいろ考えたんですけど、いまの時期どこにも売ってないし——」

キュウリー夫人はそつとかぶりを振った。その顔はとても幸せそうで、これだけで十分だよと私たちに言ってくれているようだった。

「宏樹、撮って」

私が耳打ちすると、彼はウいった様子で、首から提げていたカメラを持ち上げた。

気の早いことに、宏樹の父親は、前日のクリスマススイブに息子へプレゼントを渡していたのだ。一眼レフの立派なカメラだった。その自慢話を聞いた私たちが、病室で光ったホタルたちを写真におさめてくれと宏樹に頼んでおいたのだ。そうすれば、新しい町の病院に移ったあとも、夫人はい

つでもホタルを見ることができ。——花火を見せてあげられないかわりにと、^⑤ 私たちが考えた方法だった。

宏樹のポーズはなかなか様になっていて、左手を顎の下から突き出すようにレンズのつまみをいじるところなど、いかにも手慣れた感じだった。それまでも父親のカメラを触らせてもらうことがあったのだろう。乾いた音を響かせて、シャッターが二度切られた。光が弱いから、シャッター速度をうんと遅くして撮ったのだろうかと、私はその夏に得た知識をさらいつつ思った。

「ちゃんと撮れた？」

「そんなのわかんねえよ、現像してみなきゃ」

「じゃ、念のためにもう一枚くらい撮つといてよ」

宏樹は不平そうに涙をすすり、ふたたびカメラを構えた。が、シャッターを切る前に「ん」と声を洩らす。

「なんか……ホタルっぽくなくなってるぞ」

ビンを見てみると、たしかに光の様子が変わっていた。

ばらけていた光たちが、何故かビンの真ん中あたりに集まっているのだ。そつと顔を近づけてみて、理由がわかった。ホタルたちは、みんなして餌のカワニナのまわりに集中していた。水があたたかくなつて食欲が湧いたのだろうか。ビンの底に転がっていた哀れなカワニナは、群がるホタルの幼虫たちに持ち上げられ、光の塊が、^{※ひとたま} 人魂のようにふらふらと動きながら、水の中を徐々に上昇していく。

どうしたものかと私が腕を組んだとき、んふう、と変な息遣いが聞こえた。

「んふ……んふ……」

何かと思つて振り向こうとしたその瞬間、宏樹がどでかいくしゃみをした。

「へえええええつぷー！」

私たちは驚いて首をすくめ、キュウリー夫人もベッドの上で **エ** 身体を動かした。しかし私たちよりもつと驚いた連中がいた。ホタルの幼虫だった。幼虫たちは同時に身をひるがえして四散し、緑色の光の塊が、いくつもの小さな光に分かれて上下左右へサツと飛んで——。

「花火……」

悦子が呆然と呟いた。

病室のテーブルの上、カンペンの木々をバックにしたその小さな場所で、花火が弾け散つただ。

ほんの一瞬。

しかし、^⑥ 永遠に記憶できるほどの美しさで。

夫人の唇が、掠れた声で短い言葉を囁いた。よく聞き取れなかったが、それには何か心からの感謝を伝える抑揚があった。小さく、夫人は涙をすすった。部屋は暗かったので、もし夫人がそのとき涙を流していても、どうせよくわからなかったのだろうけど、私たちはみんな彼女のほうを

見なかった。ただ宏樹だけは、何か起きたのか理解しておらず、急に顔つきが変わった私たちのことを訝しげに眺めていた。

ビンの中で、緑色の光はふたたびホタルへと戻り、暗い森の中をふわふわと飛んでいた。

(道尾秀介『光』より)

※キュウリー夫人……清孝の祖母を指す。

※カワニナ……巻貝の一種で、ホタルの餌にもなる。

※カンペン……カンでできたペンケースのこと。

※あの川……祖母が、以前孫の清孝やみんなといっしょに、ホタルを見た川のこと。

※かぶりをふる……頭を左右にふる。

※人魂……夜空中を飛ぶ青白い火の玉。死人の体からぬけ出したたましいと考えられていた。

問1 空らん ア エ に入ることばの組み合わせとして最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- | | | | | |
|---|---------|---------|---------|---------|
| 1 | アⅡきらきらと | イⅡびくんと | ウⅡちかちかと | エⅡぼうつと |
| 2 | アⅡぼうつと | イⅡきらきらと | ウⅡしぶしぶと | エⅡびくんと |
| 3 | アⅡぎりぎらと | イⅡさらさらと | ウⅡきらきらと | エⅡしぶしぶと |
| 4 | アⅡちかちかと | イⅡぼうつと | ウⅡびくんと | エⅡしぶしぶと |

問2 ——線①「お前たち」とありますが、このことばのあとにはどんなことばが補えますか。最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 いったい何をするつもりだ？
- 2 どこに行くつもりだ？
- 3 どのくらい時間があるんだい？
- 4 もう始めないか？

問3 ——線②「もうすぐだから」とありますが、この清孝のことばをくわしく言いかえるとどうなりますか。次の「」に入ることを、文中から十一字でぬき出しなさい。

もうすぐしたら、「」が「」が見られるはずだから。

- 問4 ——線③「もう……見られないと思っていたよ」とありますが、このときの祖母の気持ちを一語で表すとどうなりますか。最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。
- 1 困惑こんわく 2 あせり
- 3 感激 4 あきらめ

問5 ——線④「ほんとは、花火も見せたかったんです」とありますが、「花火」を見せられないとあきらめたとき、私たちはどんな気持ちになっていましたか。その状態を表すことばを、文中から一語でぬき出しなさい。

問6 ——線⑤「私たちが考えた方法だった」とありますが、「私たちが考えた方法」とは何ですか。「宏樹に」という書き出しに続けて、文中の言葉を使って、二十五字以内で答えなさい。

問7 ——線⑥「永遠に記憶できるほどの美しさで」とありますが、この様子について説明した次の文の空らん「A」」「C」にあてはまることばを、「A」は三字で、「B」は四字で、「C」は二字で、それぞれ文中からぬき出しなさい。

ビンの「A」に集まっていたホタルの幼虫たちが、大きな「B」の音に驚いて四散したので、その光が「C」のように美しく見えた様子。

問8 この文章でえがかれている内容の中心として、最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 子どもたちの思いやりを受け止められないほど、夫人の心が病やんでしまっていること。
- 2 夫人に対する子どもたちの思いやりが、奇跡きせきのような素晴らしい偶然ぐうぜんを生み出すこと。
- 3 夫人への思いやりをうまく表す手段が見つからずに、子どもたちが苦惱くわうすること。
- 4 子どもたちが協力して、計画したとおりに夫人に対する思いやりを隠かくし通すこと。

3 次の詩を読んで、後の問いに答えなさい。

探しもの

西垣 脩
にしがき おさむ

① 階段は足音によって階段となる

息子は降りてくるし

母親は昇のぼってゆく

裸はだかの少年は一日中

しなやかな獣けものになつて

家の中や庭のすみずみを

歩きまわる

② 夏休みを探しているのだ

父にも一緒いっしょに探せとせがみにくる

宿題の絵は

海の風景がいいだろうと父はいい

息子は岩ばかりの海を描かいた

③ ※ 波濤はとうがはげしく咲さいているのだ

母親は少しばかりの緑に守られた

白い燈台とうだいになつた

一人ぼっちで本が読みたいから

しきりに階段をのぼる

姉は青いだけの空に

無言で雲を描きそえて

父は断崖絶壁だんがいぜつぺきを目を細めて見る

それらはいつかひろがつて

無数の 漣※れんこん痕こんになるのだが

夜の魚になる父の姿は まだ

そこにはない

※波濤……大きな波。高い波。

※断崖絶壁……切り立ったがけ。

※漣痕……波などの作用によって岩石に刻みこまれて、あとになったもの。

問1 この詩の文体・形式を次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 口語自由詩
- 2 口語定型詩
- 3 文語自由詩
- 4 文語定型詩

問2 この詩の第2連で用いられている表現技法として最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 対句法
- 2 隠喩
- 3 反復法
- 4 倒置法
- 5 体言止め

問3 ——線①「階段は足音によって階段となる」とありますが、これは階段のどんな様子を表していますか。最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 昇ったり降りたりする人がだれもいない状態で、さびれた様子。
- 2 人が足音をしのばせて昇ったり降りたりするので、静かな様子。
- 3 家族が一日に一度ずつ昇ったり降りたりして、おだやかな様子。
- 4 家族が足音を立てて昇ったり降りたりをくり返し、活気のある様子。

問4 ——線②「夏休みを探しているのだ」とありますが、これについて次の各問いに答えなさい。

I だれがどうしている様子ですか。次の文の空らん「D」・「E」にあてはまることばを「D」は二字で、「E」は四字で詩の中からぬき出しなさい。

「D」が夏休みの「E」の題材を決めようと一生懸命になっている様子。

II その一生懸命な様子が表されている行は、どこからどこまでですか。初めと終わりの三字をぬき出して答えなさい。

問5 ——線③「波濤」とありますが、「波濤」は何にたとえられていますか。漢字一字で考えて答えなさい。

問6 この詩の中で、①息子、②母、③父は、それぞれ何にたとえられていますか。詩の中から一語ずつでぬき出しなさい。

問7 この詩について説明したものととして最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 擬態語を多く用いることで、仲のよい家族が強いきずなで結ばれている様子が、生き生きと印象深く描かれている。
- 2 感覚に訴える表現を用いて、家族それぞれが自分の「探しもの」を求めている様子が象徴的に描かれている。
- 3 簡潔なことばを組み合わせ、夏休みの良い思い出を作りたいという息子の強い希望が、リズムカルに表現されている。
- 4 語りかけの口調に終始することで、広大な海を連想させるほど深い親心のあり方を、説得力をもって表現している。

問題は次ページに続く

4 次の①～⑤について、後の問いに答えなさい。

- ① 母が弟に注意している内容は、ぼくにも当てはまり、「」が^a痛い。
- ② 彼がいつも規律を守ろうとしない様子は、「」に余るものがある。
- ③ 兄は勉^b強も運動もよくできて、ぼくはまったく「」が立たない。
- ④ 一週間の海外出張を終えて、今日帰国する父を「」を長くして待つ。
- ⑤ 調子ずいたぼくのいたずらに、母はずいぶん「」を焼いたらしい。

問1 ①～⑤の「」には身体を表す漢字一字が入ります。ふさわしいものを次からそれぞれ一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 首
- 2 目
- 3 手
- 4 歯
- 5 耳

問2 —線 a 「痛」について、部首名をひらがなで答えなさい。

問3 —線 b 「強」は、何画で書きますか。画数を漢数字で答えなさい。

問4 ①～⑤の文中には、字の使い方方を誤ったところが一か所あります。その部分をふくむ一語をそのままぬき出して答えなさい。

